

小曲吟さまれ申候。中禪寺湖の音楽はイ調ホ調の長音階にて候。快き協和音のコーラスにて候。それ以上何物をも見出しがたき平面美に候。皮相美に候。

御約束の白樺の皮しのばせしナイフもて試み候も思はしからず近所の茶屋にて人のよささうな姫さんより貰ひおき候。然し歌の方はあやしきものにて候。この皮をたきつけにいたし候よし氣がりの一つにて候。

むら／＼と立つた樺の細い幹か白絹のやうな柔い光澤をおびてそこらに落ち散つた葉は斑に金色に光る。

君が十八番を思ひ出さする白樺の林もこれあり候。

落ちて來る一葉のつぎにまたおちむ黄なる一葉のまたるゝ夕

この作者の心もちてみるひまもなく通りすぎしはいまものこりをしく候。

明日は日光に參り徳川三百年の歴史が私に遺しおきたる唯一の作品をみて歸京の途にのほり申

すべくこの宿も今夜限りにて候。よべきし湖の悲しき寂しき鳥のこゑ忘れず候。おみせしたきは西の戦場原  
共にきゝたまは今宵のそのとりの歌。

露

文科一部二年 山中 たか

露こそは自然の母君の此の世にありとあるものをはぐくみ給ふ愛の御涙ならめ。なさけあつき母君はひねもす己が務をよくこそはげみたれど野にも山にも草にも木にも甘き汁をいどさはおかせ給ひて其のいたつきを慰め給ふ。されば秋の夜を夜もすがらなく虫も其の御恵みによりて聲からず事なく春の日をひねもす舞ふ胡蝶も其の御なさけによりて疲るる事なく己がじじ其の務をつとめいそしむにぞありける。さては塵の世に立ち騒ぎて苦しき生をいどなむものにもまた同じう御恵みをかけさせ給ひて疲を癒し悶を慰め給ふぞありがたき。月あかき夜野邊にさまよへば千草八千草の其の恵みに潤ひ

宿りて美しく輝けるは美人の臉うるほひしに似て何をうらみ何をかこちてといどあはれにもまたいちらし。

かく數へあぐればさても盡きせぬ御恵みの深さよ。いども尊くなつかしき自然の母君はかく春の朝も秋の夕もさては晝となく夜となく此の世にありとあるものをはぐくみ給ひてひねもすの務に疲れし身を慰め夜もすがらの悶に苦しめる心を救ひ給はんとて涙の露をおとさせ給ふにぞありける。かく自然の母君にはあつき涙を持たせ給ふを此の世の人にして若しいささかも涙なかりせば心なき岩木にことならざるべし。かくてはさらぬだにうき事多き此の世いかかわびしくつらからまし。あはれ自然の御母の此の美しの御涙我等もなぞらへて持たまほしきものにこそ。

郊遊會

文科一年 平田 いち

秋閑なる十月四日群馬縣太田に郊遊會を催され

て白妙の玉をかざし吹く風にはろほろとこぼれてあな面白しとの感起さしめ或は御空に輝ける星の影さへ宿して此處も高き雲の上かと疑はしめ或は靜かに虫の聲をふむもすぬれしむるは天の浮橋渡る心地して我が世の限りを此處にと思はしむるもかたじけなし。みづみづしき緑の木の色もゆるばかりに輝く眞紅の紅葉其の恵みに潤ひて天つ日に照りそひたるいづれめでたからぬかは。かげろふもゆる山路に咲き匂ふ葎の色を深からしめ枝もたわわに茂れる糸萩に香を合ませて置きあまるが分け行く袖にもすそにはらはらと散りかかるは我れをしたふ妹の涙にも似てなつかし言はん方なし。赤き花うばらの小さき花びらに包まれたる芥子撫子などの上におかれたるなごいとし少女子の林檎の色したる頬をつたふあつき涙の玉かあらぬかといど愛らしうて見る人にあはれをもよほさしむ。さては池の面の白蓮の青き廣葉におかれたるは尊き聖人の罪深き人の子の上を救はせ給ふとてそそぎ給ふ御涙のやうにてまことに尊し。芙蓉花に